

米山奨学生の金君、ようこそいらっしゃいました。

100年に一度といわれる転換期を迎え、かつてない規模と速度で業種と業界を超えた「異種格闘技戦」が本格化しています。なかでも競争が激しいのが動力にモーターを使う電動化です。

昨年9月にビックニュースで紙パックを使わない掃除機で知られる英家電大手ダイソンが2020年の発売を目指して電気自動車の開発を明らかにしています。テスラが去年7月から納車を始めた「モデル3」は受注台数50万台を超え、世界で一番市場の大きい中国で電気自動車を最も多く販売しているBYDはもともと電池メーカーであり、振興メーカーの追い上げは急です。

2016年のデータですが世界で生産されたHVは243万台、PHVは35万台、EVは48万台、2025年度にはHVは2578万台、PHVは539万台、EVは370万台になると推測されていますが、各国での環境規制が進み、自動車メーカーがEV生産に一気に転じる可能性があります。

いま自動車業界で起きている変化は「CASE」だといわれています。「つながる」「自動運転」「シェア」「電動化」の英語の頭文字から今を言い当てた言葉ですが、乗り物が馬車から自動車に変わった1910年ごろの変化以上のイノベーションにつながるかもしれません。

「つながる」は車がインターネットなど外部と常時接続する技術です。

「自動運転」の実現には最新の三次元地図データを取得したり、車同士の加減速の情報などをやりとりする通信が欠かせません。

「シェア」は所有から共有へ、米・ヨーロッパで普及してきていますが、日本ではマイカーに人を乗せて料金をもらおうと違法な白タク行為になるので普及していませんが、「タイムズ24」などの「カーシェアリング」はコインパーキングに駐車してある車を会員が共同で使う仕組みで、利用者が増えています。若い世代の「車離れ」がよく言われますが、若い世代が車から離れたのではなく、車を所有するよりもいかに利用するかという合理的な考え方に変わり始めているのです。「電動化」は電気自動車、PHV、FCV(燃料電池自動車)、車が様々なものにつながり、AIが運転し始めて人が出来なかったことができるようになったときに社会がどう変わって私たちの暮らしはどう変わるのか。

想像する年令ではありませんが、大きく変わることは確かですが、それよりも世界が平和であってほしいものです。